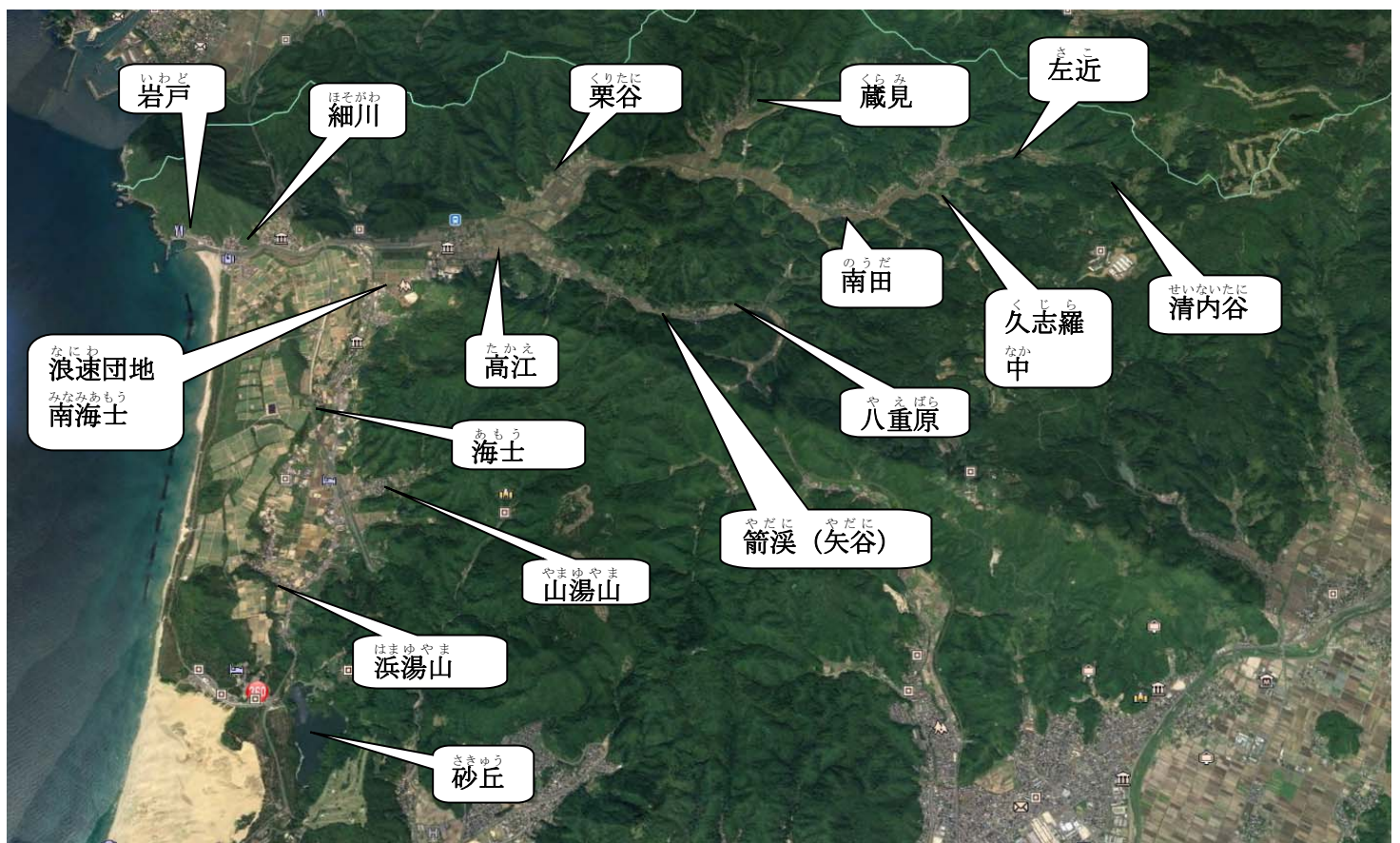


福部の集落の名前と地名の由来

縄文時代 弥生時代 古墳時代 飛鳥時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代 室町時代 江戸時代 明治時代 大正・明治・昭和時代

歴史を物語る「集落の地名の由来」

参考文献	作者・発行	年代	備考
因幡民談記（稲葉民談記）	小泉友賢	江戸時代・元禄1年・1688年	
因幡誌	阿部恭庵	江戸時代・文化5年・1734年	
岩美郡史	檜崎竹造	明治時代45年・大正1年・1912年	岩美郡役所が編集
服部郷土史	服部役所	大正5年・1916年	
福部村誌	福部役所	昭和56年・1981年	
新編福部村誌	福部役所	平成12年・2000年	



集落の名前	航空写真	地名の由来など
砂丘	 <p style="text-align: center;">砂 丘</p>	<p>砂丘一帯は天然記念物として保護されて、昭和29年には国鉄の周遊地として指定された。</p> <p>観光地として見直されて、喫茶店、土産物店、旅館等が建ちはじめた。</p> <p>昭和30年に国定公園に指定。</p> <p>昭和38年に国立公園に昇格。</p> <p>昭和40年に砂丘観光協会を設立。</p> <p>昭和44年に公園道鳥取砂丘線が開通し、覚寺～砂丘間が国道9号線バイパスとなる。</p>

その後県営駐車場整備、大型店舗の進出、村営売店など一大観光地として発展。

昭和38年・1963年に砂丘岩戸海岸道路開通。
平成20年・2008年に日本ジオパーク認定。
平成22年・2010年に世界ジオパーク認定
砂丘に定着住民も徐々に増えて昭和34年に鳥取砂丘の中にある集落「砂丘地区」として行政区となる。

浜湯山



浜湯山



湯山村全図

湯山の地名は古文書によると、薬師堂（現在の湯山地区の中程にあるお堂）の傍で温泉が湧き出たため名付けられたとある。

温泉ではなく25℃以下の「冷泉」であったようである。

昔は湯山村として現在の浜湯山、山湯山を呼んでいたが因幡志によると、魔尼寺のある方を「山湯山」と呼び海と池の方にあるのを「浜湯山」と呼んだ。

江戸時代中期の古絵図にある「湯山池」は古代（縄文～古墳時代）は日本海とつながり福部の湾口であったとされる。

浜湯山には神功皇后が三韓征伐の時に寄港したとの伝説があり、この地には神功皇后に関する地名が多く残されています。

★神功皇后伝説は「福部の伝説」で詳しく説明する。

湯山池は浜湯山出身の鳥取藩士「宿院義般六平太」が江戸時代後期に、多鯰ケ池から湯山池までの約850mの暗渠（地中に造られた水路）を掘り、多鯰ケ池の水と砂丘の砂を流し込んで水田に干拓した。

★宿院義般六平太の干拓事業は「ふくべの発展に貢献した3人の偉人」で詳しく説明する。

干拓がされる前のこの地域の住民はわずかな農地と海・池の漁によって生活する半農半漁の生活で、海岸では製塩業もしていたと記録に残る。湯山池ではフナ、コイ、ナマズ、ウナギ、エビなどを塩煮にして鳥取市中に売り出していた。

浜湯山の氏神神社

神社名：弥長神社

ご祭神：誓田別命（応身天皇）

山湯山



山湯山

山湯山は江戸時代は「新湯山村」と記されており
浜湯山と元々、一つの集落であった。

干拓がされる前のこの地域の住民はわずかな農
地と池での漁で生活する半農半漁の生活で、特に
池では浜湯山と同様にフナ、コイ、ナマズ、ウナ
ギ、エビなどを塩煮にして鳥取市中に売り出して
いた。

現在鳥取市湯所にある「天徳寺」は承和12年(8
45年)にこの地に「多鯰山長福寺」として建立
された。

700年にも及ぶ歴史があるが、山湯山の何処に
あったかは不明である。

お寺が浜湯山、山湯山の近くにあったことで、天
徳寺の檀家が多くあることで確実な史実である。

山湯山の氏神神社

神社名：湯山神社

ご祭神：蒼田別命 (応身天皇)

海士



海士



海士村全図

海士と書く地名は、隠岐の島・海士村、石川県・
海士岬などがあり、本来、海士と書くべきものを
福部では「あもう」と読むのは「あま」がなまっ
たものと思われる。

因幡誌にこの集落も浜湯山・山湯山と同じく半農
半漁で生活していたとあり、特にこの集落にこの
名前を付けたのは、古代からこの地は人が住みつ
き縄文時代(石器時代も含めて)の遺跡もあり、
また式内社の服部神社もこの集落にあるため
である。

奈良時代の因幡の戸籍に「海部」と名乗る男女
17名の名前が見え、海士はこの一族と何らかの
関係をもっていたのかもしれない。

式内社服部神社は「服部」は服部のことで大和朝
廷の時代の機織り職人の技術を世襲して仕えた
品部(古代日本の技能を持った集団)、この地に
機織りの工匠がいたと思われる。

海士の氏神神社

神社名：服部神社

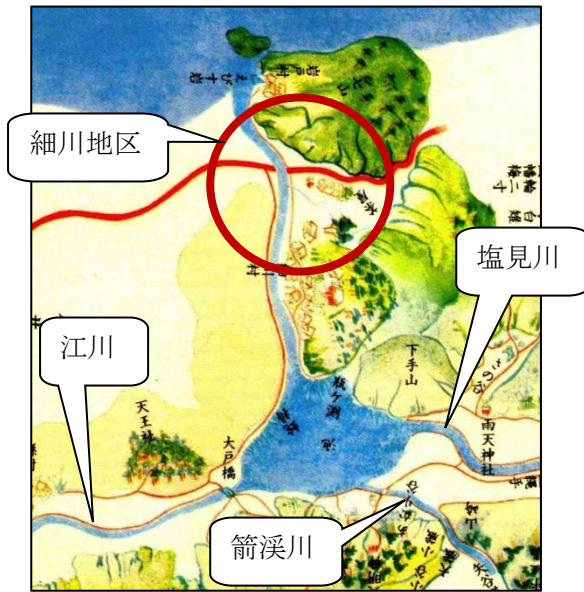
ご祭神：天羽槌雄命 (日本神話の神)

天棚機姫命 (機織りの神)

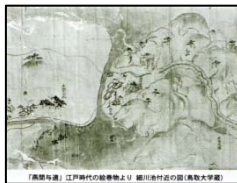
細川



細川



細川村全図



因幡誌によれば細川は但馬街道に通じる要地で、昔で言うところの「馬駅」「宿場」ではたご1軒、茶屋4軒、馬車屋3軒など相当賑わっていた集落である。

細川の名前の由来は不明であるが、福部の古老が言うには、福部の川の全てがこの地を通り日本海へ注ぐため「細い川」「細川」と呼んだのではとのこと。

江戸時代中期の古絵図を見ると、福部の川(江川、塩見川、箭溪川)3本が池(細川池)を通じて岩戸を経て日本海へ注いでいる。

細川池が干拓される前のこの地域の住民は、わずかな農地と池での漁で生活する半農半漁の生活で、浜では桑の栽培をして養蚕業が盛んであった。

細川の名物「細川梅」が特に有名で、江戸時代中期・明和7年(1770年)時の鳥取城主・池田光仲が善光院へ遊覧したとの記録が残る。

細川の氏神神社

神社名：細川神社

ご祭神：武甕槌命 (伊邪那岐命の御子)

岩戸



岩戸



因幡民談記によれば岩戸村は細川村の出村なりとあり、江戸時代・享保年間（1720年頃）に岩戸村として別れた。

岩戸の地名の由来は不明であるがこの地が海に面して岩だらけの集落で「岩の戸口」「岩戸」との説もある。

因幡誌の1795年の編集で初めて「岩戸村」の名前が見える。

作者の阿部^{あべきょうあん}恭庵が船で網代港から海岸沿いに岩戸沖から描いたスケッチ。

「服部郷土史」や「岩美郡史」によると、島根県石見の漁民が網代に住み付き、その後、江戸時代の1620年～1630年頃に岩戸へ移住。

また後に若狭国・田^{たがらす}鳥（若狭湾の小浜付近の田鳥漁港）からもこの地に住み付いた。

岩戸の氏神神社

神社名：岩^{いわど}戸神社

ご祭神：天^{あまてらすこうだいじん}照皇大神

（岩美郡史によれば伊勢神宮から室町時代・長禄2年・1457年～1460年頃）に島根・石見の人々がこの地へ勧請したとある）

浪速団地
南海士



浪花団地・南海士・海士

浪速団地は福部村時代に福部村総合計画の一つで、若者の村内定着と人口増加を目的に、昭和58年に海土地内に建設された村営住宅。

駅前



駅前

以前の福部駅前一帯は細川池の中で、明治40年頃まで一軒の民家もなかった。

明治43年に「塩見駅」の開設により、行政施設、教育施設、産業施設や商店などが立ち並び、名実共に経済、行政、文化の中心地へと変貌した。

高江



高江

因幡誌によると、高江村の前は細川池が広がる場所で、向かい側の栗谷から見れば「高い入り江」で「高江」と呼ぶようになったようである。

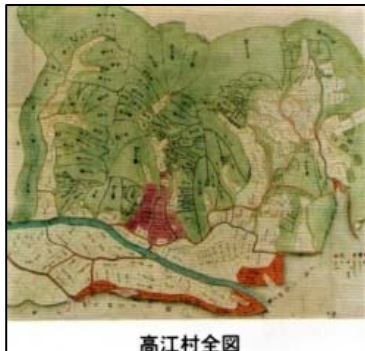
栗谷と同じように高江周辺には古墳群があり、難波千軒^{なんばせんげん}*1と呼ばれるほど栄えた地域である。

*1 ^{なんば}難波とは高江周辺の昔の地域名で栄えた当時は、たくさんの人々が住んでいたので^{せんげん}千軒と呼んだ。

高江の氏神神社

神社名：^{たちかわ}立川神社

ご祭神：^{せおりつひめのみこと}瀬織津姫命（海の神）



高江村全図

やだに
箭溪

(矢谷)

古くは「矢谷」と記され明治2年に「箭溪」に改名されている。



箭溪

因幡民談記によると、「八重原は矢谷の内なり」とあり矢谷は摩尼寺や太閤ヶ平(豊臣秀吉が陣を構えた山)へ通じる道の入り口にあることから矢谷が本村であつたであろうと思われる。

現在、八重原の氏神・荒坂神社は「延喜式神名帳」によれば元々矢谷の地にあつたとされ、地名の荒坂も高江から矢谷にかけての一带の地名であるにも関わらず現在は、「八重原」の氏神様として移されているのは謎である。

古老の話によれば、南北朝の頃(室町時代:1400年頃)塩見源太が矢谷に蛇山城を築いた時、城主に同行した農民(兵士)が矢谷の住民を八重原へ追いやつた。

その時荒坂神社も移したとのこと。

箭溪の氏神神社

神社名: 塩見神社

ご祭神: 譽田別命(応身天皇)

やえばら
八重原



八重原



八重原村全図

因幡民談記によると、「八重原は矢谷の内なり」とあるが、一方因幡誌によれば逆に「矢谷は八重原の出村なり」とある。

言い伝えによれば、矢谷が本村で八重原が出村だというのが本当の所だと思われる。

八重原の氏神神社

神社名: 荒坂神社(式内社)

ご祭神: 大己貴命(大国主)

★式内社とは平安時代延長5年(927年)にまとめられた『延喜式』に「官社」に指定されていた全国の神社2861社の一つ。

くりたに
栗谷



栗 谷

古代には、入り江が栗谷近くまで入り込んでいたので、当時は相当に繁盛した地域であった。

それを裏付けるのは、この地には縄文時代、古墳時代の遺跡が多くあり、また坂谷神社には「坂谷権現」と呼ばれる巨石に神代文字*²が刻まれた遺跡も残っている。

文字の意味は未だに解明されていないが、ふくべの遺跡に残る唯一の文字遺跡で貴重なものである。

* 2 神代文字とは漢字伝来以前に古代日本で使用された様々な文字。

栗谷の氏神神社

神社名：^{おかざま}岡崎神社

ご祭神：^{ほむだわけのみこと}譽田別命（応身天皇）

神 社：^{さかたに}坂谷神社

ご祭神：^{おおやまつみのみこと}大山津之命

日本神話に登場する神で古くは古事記に記述されている神様。

のうだ
南田



南 田

この谷（蔵見、久志羅、中、左近、清内谷）では各むらとも共通した暮らしであったようである。

南田はふくべの中心でもあり、岩美の岩常^{いわつね}に山越えで通じる山街道の入り口のためか、煙草屋あり酒屋、豆腐屋などがあつたようである。

南田の氏神神社

神社名：^{のうだ}南田神社

ご祭神：^{とよたまひめのみこと}豊玉毘売命（日本神話に登場する女神）

蔵見



蔵見



蔵見村全図

この地は山越えで岩美の岩常、池谷に通じる街道があり、細川池の栗谷船着き場に荷揚げされた荷物はこの山街道を通じて交易をしていた要所であり、かなり賑わっていたものと思われる。岩常に通じる坂を高野坂と呼び「高野千軒」の言葉通り交易で「蔵の立つ村」から「蔵見」と呼ばれていたのかも知れない。

蔵見の氏神社

神社名：武王神社

ご祭神：経流主神（日本神話の神）

久志羅
中



久志羅・中

岩美郡史によると、宇部野村大字宮下村伊福部系図に、武内宿禰12代の孫「久遅良臣」とあり、久志羅地区に住まいを構えたことから久遅良の「遅」は志に通じ、久志良（くじら）と言う。

久志羅の氏神社

神社名：久志羅神社

ご祭神：天児屋根命（日本神話の神）

中の氏神社

神社名：中神社

ご祭神：武甕槌命（古事記・日本書記に登場のする神）

左近



左近

この地には中世のお城「瀧山城^{たきやま}（谷城）」があり、城主を塩見左近と言った。その名前から「しおみさこ」→「さこ」と名付けたとされる。

まつかぜ むらさめ
松風・村雨伝説の地

●詳しくは別章の「福部の伝説」に記述する。

左近の氏神神社

神社名：向垣神社^{むかうがき}

ご祭神：大山祇命^{おおやまづみのみこと}（日本神話の神・山をつかさどる神）

清内谷



清内谷

昭和40年に左近むらから独立して清内谷と集落名を変更。

戦前までは比較的恵まれた集落で煙草栽培の他、麻、三椏^{みつまた}、黄櫨^{はげ}、養蚕^{ようざん}、冬場になれば炭焼きをするなど生計を立てていた。

この地域の米は水質も良いことから美味しいと言われていた。

清らかな水に溢れた谷→清内谷と名付けられたのではと考える。

清内谷の氏神神社

神社名：大神山神社^{おおかみやま}

ご祭神：大山津之命^{おおやまつみのみこと}

日本神話に登場する神で古くは古事記に記述されている神様。